〈紹　介〉

エコノミクス
第4巻第2号
1999年11月

国際研究所・美術館・学会見聞記

——アボリショニズム研究を軸に——

徳島　達朗

1　はじめに
2　国際反奴隷制協会ライブラリー（ロンドン）
3　ブリストル市美術館（ブリストル）
4　「大西洋奴隷貿易学会」（ブリストル）

1　はじめに

筆者の当該分野について研究の一端は，本経済学部『エコノミクス』に投稿掲載されている。[1]その後，翻訳作業が完成したので，1999年4月7日，同翻訳書をロンドンの国際反奴隷制協会 Anti-Slavery International にとどけた。[2]さらに4月9日・10日，ブリストルで開かれた学会「大西洋奴隷貿易とブリストル」The Atlantic　Slave Trade and Provincial Britain に出席した。ブリストル市美術館では学会にあわせて特別企画「大西洋奴隷貿易展」を開催中であった。

本稿では，そこでの見聞を若干記しておくことにする。

2 国際反奴隷制協会ライブラリー

写真1

国際反奴隷制協会 Anti-Slavery International（以下 ASI と略記する）は，1839年トマス・クラークソンを議長として設立された，世界最初の人権擁護団体である。国際連合において，顧問的地位を有している。機関誌 Anti-Slavery Reporter は1840年以来発行され，現在はクオータリで発行されている。「各国で奴隷制に対して戦っている草の根グループと提携した ASI の広範な調査活動により，奴隷制度がいぜんとして世界中に存在するという事実が，世界の注目を集めている。ASI は，成人および児童の束縛労働，子供の売春強要，女性，子供の人身売買，強制労働に反対する活動を世界中で行っている。非良心的な雇い主が，国外から来た家事奉公人を利己的に酷使しており，こうした奴隷制はイギリスでさえ存在する」[3]と，ASI は考えている。著者のギッフォード女史はインドに生れ現在はロンドンに在住する。1989年に婦人問題に関する業績によりネルー賞を受賞している。少数民族救済委員会委員長，王立芸術協会会員，国際版奴隷制協会理事である。

ギッフォード女史は，この著書の印税を児童労働の廃止を求める ASI の活動に寄付することにしており，筆者も日本版の印税を同じように寄付することにしている。

同協会のライブラリアンのジェフ・ホワース Jeff Howarth（写真1）氏には訪問の予定日を電子メールで知らせておいた。また現在の筆者の問題関心「アミスタッド号事件」に関連する質問をいれておいた。それは1840年ロンドンで開かれた国際反奴隷制大会において，議長をつとめたトマス・クラークソンは「アミスタッド号事件」について挨拶で言及しているかどうか，またこの大会で「アミスタッド号事件」がとりあげられたか否かということであった。

同協会は地下鉄ヴィクトリア線でテムズ川をくぐりストックウェルで下車徒歩10分である。Stableyard Broomgrove Road の住宅街の中にあり

Thomas Clarkson House との看板が掲げられている。事務所と図書室（写真２，３）がある。図書室の名称は Anti-Slavery International Reference Library であり，二つのセクションのコレクションがある。第１は現代のコレクションで，現代における「奴隷制度」に関するレポート，国連文書，ILO 報告書，協会の機関誌，パンフレットなどである。第２は歴史的なコレクションで，200年にわたる反奴隷制運動に関する文書で，論文集，パンフレット，書籍，報告書，定期刊行物，写真などである。大学院レベルの研究に適する資料を含み，コピーが可能である。筆者の前記問題意識にそくして，ジェフは協会所蔵の資料 Anti-Slavery International The Binns and Supplementary Collections of Anti-Slavery Tracts, Pamphlets and Books を閲覧させてくれた。1841年当時の同協会の機関誌 The British And Foreign Anti-Slavery Reporter の記事により「アミスタッド号事件」を調べることができた。当然ではあるが，かなりとりあげられていた。詳細は別途紹介したい。

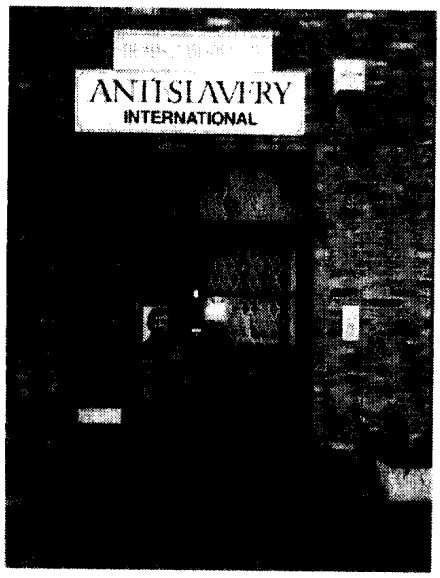

写真２

８月に日本版の印税を持参することを約し，反奴隷制協会を辞した。

なお，その直後，ASI のある地区で爆弾テロが発生したことを知り驚いている。「極右テロ増殖　震える英　連続爆弾事件　非白人有力者らに殺害予告」（４月29日付　『朝日新聞』）「アフリカ系移民が多いロンドン南部ブリクストン地区の路上で17日，鉄くぎの入った爆弾が爆発。39人が重軽傷を負った。」と報じている。「支配の代償」「帝国主義のイディオロギー」などの考察が課題として山積していることを感じている。

写真３

3　ブリストル市美術館

4月9日・10日に開かれる「大西洋奴隷貿易とブリストル」という学会に参加するためにブリストルにまわった。西イングランド大学の地域史研究センター主催の国際的な学会で，経済史学会およびブリストル市の後援であった。コンファレンスの正式名称は，"The Atlantic Slave Trade and Provincial Britain"である。前日到着した筆者はツーリスト・インフォメーションで情報を集めていたが，その折に一冊のパンフレットが目にとまった。それは非常に興味深いものであった。ブリストル市をはじめ美術館が中心となり商業団体も援助して作成したものである。これらの発行主体，内容に正直驚き筆者の研究上，有益な冊子として早速購入した。[4]（図1，2）このパンフレットは大西洋奴隷貿易，砂糖貿易と関連した遺跡などをたどれうように工夫したガイド＝マップなのである。そのなかには，1780年代末，トマス・クラークソンが奴隷貿易の実態調査の最初の地をブリストルと定め訪問したとき，奴隷船に乗船した経験を持つ船員を紹介してもらったパブ・セヴンスターや，砂糖プランテーションで富を築いたジョン・ピニー（1740―1818年）の屋敷（ジョージアン・ハウス）などが紹介されている。

ところで，美術館の正式名称は Bristol City Museum & Art Gallery であるが，次のテーマで特別展を開催している。「尊敬に値する貿易だったのか？ブリストルと大西洋奴隷制」A Respectable Trade? Bristol and Transatlantic Slavery. 内容は展示，ワークショップとイベントで，会期は3月6日から9月1日までである。

リーフレット（図3）の内容を紹介しておく。全開にするとA3サイズであるが，「ブリストルと大西洋奴隷制度：三角貿易」の分かりやすい説明がある。＊ブリストルと西アフリカの関係の特徴について，ブリストルから製造品（鉄砲，繊維品，アルコール，金属製品）を積込んで西アフリカへ向かい，そこで販売または人間と交換されたとしている。(1)まずブリストルについては，以下のことが書かれている。＊16世紀以来アメリカとの砂糖，煙草貿易が継続したこと。＊1698年以来大西洋奴隷貿易に参加，ブリストルは1730年までにロンドン，リヴァプールとともに主要な奴隷貿易港となったこと。＊

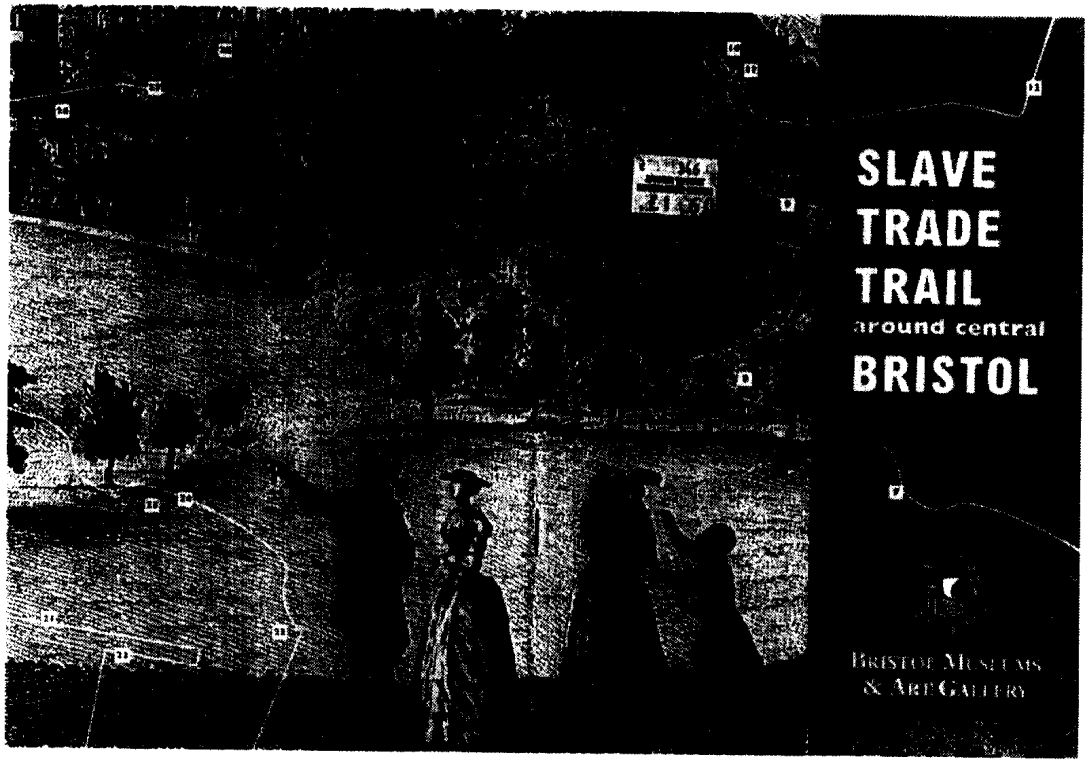
SLAVE
TRADE
TRAIL
around central
BRISTOL
BRISTOL MUSEUMS
& ART GALLERY

図 1

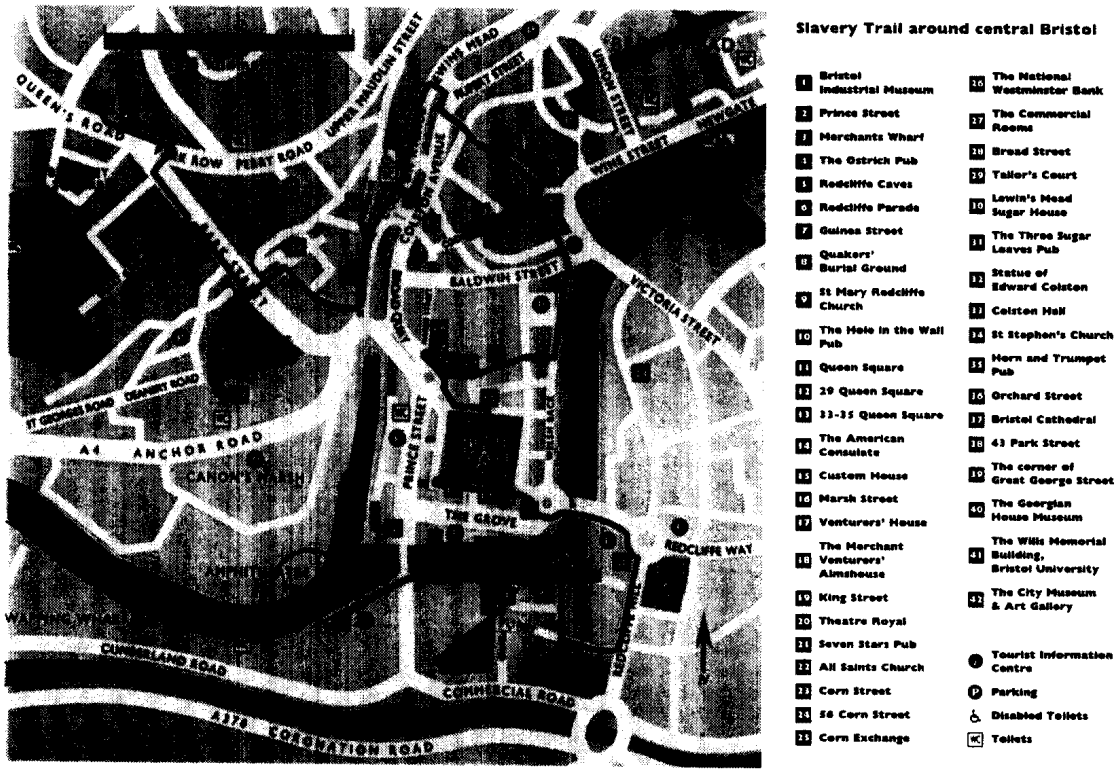
Slavery Trail around central Bristol
1 Bristol Industrial Museum
2 Prince Street
3 Merchants Wharf
4 The Ostrich Pub
5 Redcliffe Caves
6 Redcliffe Parade
7 Guinea Street
8 Quakers' Burial Ground
9 St Mary Redcliffe Church
10 The Hole in the Wall Pub
11 Queen Square
12 29 Queen Square
13 33-35 Queen Square
14 The American Consulate
15 Custom House
16 Marsh Street
17 Venturers' House
18 The Merchant Venturers' Almshouse
19 King Street
20 Theatre Royal
21 Seven Stars Pub
22 All Saints Church
23 Corn Street
24 56 Corn Street
25 Corn Exchange
26 The National Westminster Bank
27 The Commercial Rooms
28 Broad Street
29 Tailor's Court
30 Lewin's Mead Sugar House
31 The Three Sugar Leaves Pub
32 Statue of Edward Colston
33 Colston Hall
34 St Stephen's Church
35 Horn and Trumpet Pub
36 Orchard Street
37 Bristol Cathedral
38 43 Park Street
39 The corner of Great George Street
40 The Georgian House Museum
41 The Wills Memorial Building, Bristol University
42 The City Museum & Art Gallery
Tourist Information Centre
Parking
Disabled Toilets
Toilets
QUEEN'S ROAD
PERRY ROAD
Upper Maudlin Street
Lewins Mead
Corn Street
Wine Street
Broadmead
Colston Avenue
Baldwin Street
Victoria Street
St George Road
Queen Road
A4 ANCHOR ROAD
Canon's Marsh
Prince Street
Queen Ave
The Grove
Redcliffe Way
Queen Square
Queen Street
Commercial Road
A372 Coronation Road

図 2

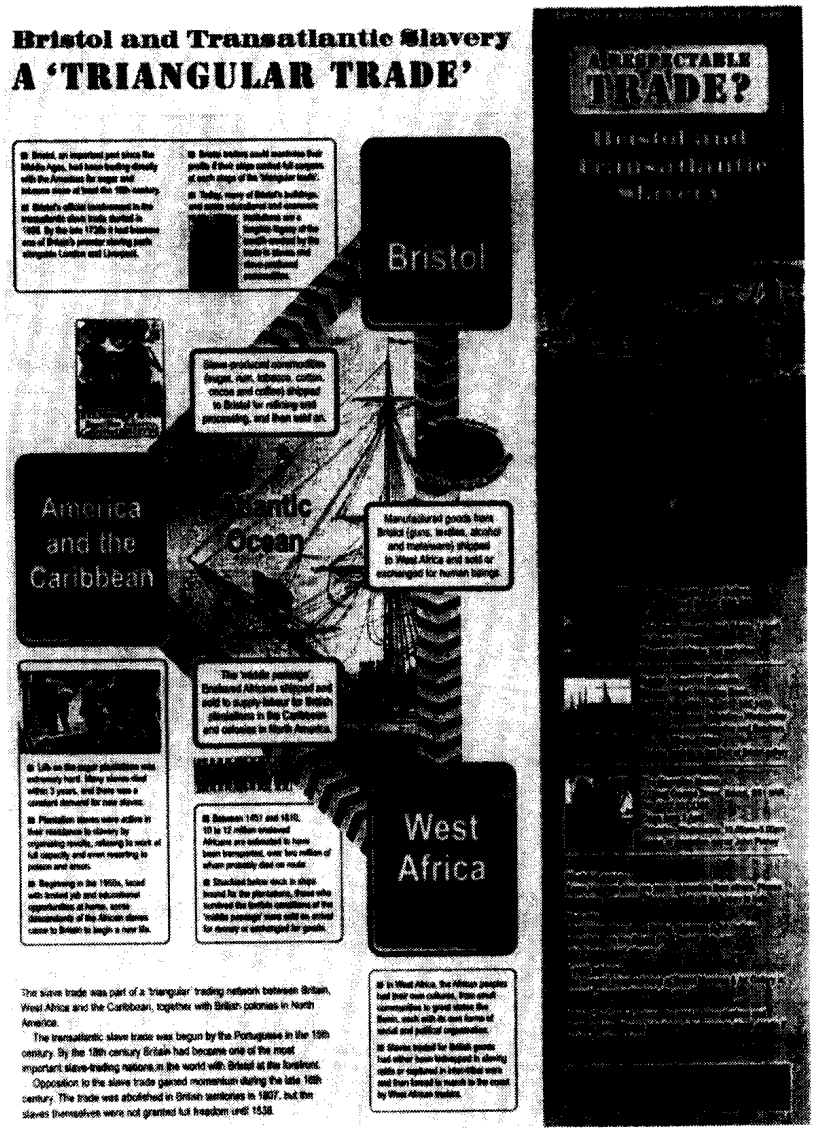

図 3

ブリストルの商人たちは積荷を満載して「三角貿易」に従事し利益をあげた。＊今日使用している教育施設，ビジネスに関わる建造物の多くは，この奴隷貿易，奴隷制による物産から得た富の遺産である。＊西アフリカからアメリカおよびカリブ海に向かう大西洋は，「中間航路」といわれる。奴隷化されたアフリカ人は船積みされて，カリブ海，北アメリカ植民地の労働力として売られたとしている。(2)西アフリカについては，以下のことが書かれている。＊西アフリカにおいて，アフリカ人は独自の文化をつくり，小さな共同体からベニンのような大きな国家まで，それぞれの社会形態と政治組織をもっていた。＊イギリスの商品と交換される奴隷は，誘拐あるいは部族間の戦争で

捕らえられ奴隷商人に強制されて海岸部へ連行されてきた者たちである。＊1451年から1810年まで，1200万人におよぶアフリカ人が奴隷化され運ばれたという推計があり，その内，200万人以上が途中で死んだと考えられる。＊奴隷船の甲板の下に鎖に繋がれてプランテーションに運ばれたが，「中間航路」の悲惨を生き残った生存者は現金で売られるか，商品と交換された。(3)アメリカおよびカリブ海諸島については，以下のように書かれている。＊砂糖プランテーションでの生活は極度に厳しいものであった。多くの者が三年以内に死亡したので，新たな奴隷への需要が常に存在した。＊プランテーションの奴隷たちは，反抗を組織し，全力投球で働くことを拒否し，毒殺，放火にまで訴えて奴隷制度に抵抗した。＊現代のことになるが，1950年代初には，職業や教育の機会が限られていたので，アフリカ奴隷の子孫たちのうちには，新しい生活を始めるためにイギリスへ渡って来た者もあった。＊最後にアメリカ，カリブ海諸島とイギリスの関係の特徴を記している。奴隷生産による生産物（砂糖，ラム，煙草，綿花，ココア，コーヒー）が船積みされブリストルへ運ばれ，精製，加工，販売された。

リーフレットの裏面には，会期中の各種イベントの案内が掲載されている。目に付くものを若干紹介すると，学童のワークショップ School Workshops では，「ジョージアン・ハウスでの生活」，三角貿易とブリストル，西アフリカ文化(ベニン)，ブリストルと大西洋奴隷制などが含まれる。休日の児童向けの活動 Children Holiday Activities では，アフリカの美術と工芸，ホット・チョコレート，アフリカのプリント，アフリカの宝石，お面とお話，昔話，ジョージアン・ハウスでの生活，音楽，カリブ海のお面とお話などが企画されている。

4 「大西洋奴隷貿易学会」

University of the West of England (Bristol) , Faculty of Humanities, Regional History Centre が中心となり，開催された学会で名称は，The Atlantic Slave Trade and Provincial Britain で，Economic History Society および Bristol City Council が後援している。会期は 4 月 9 日・10日であ

った。参加者は63名で日本人は3名。英文学の研究者と筆者であった。

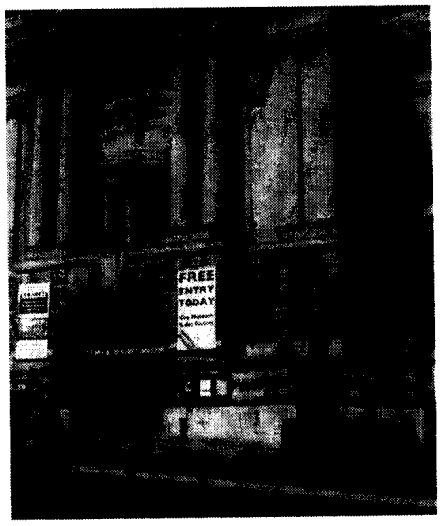

写真4

第一日目は，Bristol City Museum and Art Gallery（写真4）で，参加者の受付および主催者（Madge Dresser, University of the West of England, Bristol）および美術館のStephen Price（Director of Bristol City Museum and Art Gallery）氏の歓迎挨拶のあと，特別展を見学した。参加者は見学後，レセプション会場のBristol City Council Houseへ移動した。午後7時から開会セレモニーがあり，ブリストル市長の歓迎の辞（写真5）およびRobin Blackburn（King's College, Cambridge）氏の開会挨拶「奴隷制と反奴隷制」のあと，会食Conference Dinnerで第一日目は終了した。

第二日目のコンファレンスは郊外のLeigh Courtに会場を移して行われた。この館は古くチューダー期（1558年）にジョージ・ノートン卿によって建てられたものである。時代が下って1811年にフィリップ・ジョン・マイルズ卿Sir Philip John Milesが買い取った。フィリップ・マイルズはブリストルの船主，砂糖貴族，銀行家である。彼は大変富裕で記録上最初のブリストルの百万長者である。

午前中の「奴隷貿易の経済的視点」Economics of the Slave Tradeでは，三人の報告があったが，筆者としては，ブレンダ・ブキャナン博士Dr Brenda Buchanan, University of Bathの報告に関心をいだいた。[5]それはリヴァプールの奴隷貿易といえばマンチェスターの木綿工業との関連が有名であるが，その他の奴隷貿易港の場合の積荷のアソートメントはいかなるものかという問題関心が

写真5

存在するからである。ブキャナン報告でブリストルが火薬産業の発展した地域であることが確認できたし，アフリカへのインパクトの激しさからいえば綿布よりも火薬および鉄砲の方が大きな意味を持つと思えるからである。綿布の方はイギリス側の市場拡大，産業発展に寄与したといえる要素だが，火薬と鉄砲の方は，アフリカ側支配者の部族あるいは王国勢力の拡大という欲求に裏打ちされた需要を生み出し，奴隷貿易の拡大とアフリカの民族的分裂の深まりという歴史の悪循環を促進したからである。

午後の報告ではマリカ・シャーウッドの報告に関心を抱いた。[6]イギリスは1807年の「奴隷貿易の禁止」，1833年の「奴隷制度の廃止と解放」，つまり「abolition と emancipation」に決着をつけているはずなのである。シャーウッド報告はタイトルにみるごとく歴史の常識に挑戦する事実を突きつけているわけである。詳細は別稿を用意する予定である。

昨年（1998年）上映されたスピルバーグの映画「アミスタッド」に触発されアボリショニズム研究[7]を開始したところであるが，筆者にとって今回のブリストルでの学会は，この分野の研究の前進のために有益であった。(1999年7月3日記)

1）翻訳：ザバヌー・ギッフォード著「トマス・クラークソンと反奴隷制運動」（その1）九州産業大学『エコノミクス』第2巻第2号（1997年11月），同（その2）第2巻第3・4号（1998年3月）同（その3）第3巻第1号（1998年8月）所収。

2）ザバヌー・ギッフォード著，徳島達朗監訳『アボリショニズムの社会史—反奴隷制運動とクラークソン』（梓出版社　1999年4月刊行）

3）同上書「国際反奴隷制協会による序文」参照。

4）*Slave Trade Trail around central Bristol*, 1998 Bristol Museum & Art Gallery.

5）Dr Brenda Buchanan (University of Bath), The 'Africa Trade'and the Gunpowder Industry of the Bristol Region.

6）Marika Sherwood (Institute of Commonwealth Studies), The British Trade in Slaves in the 1840's.

7）徳島達朗「アボリショニズム研究（序）「アミスタッド号反乱」—インターネット情報を中心に—」（九州産業大学『エコノミクス』第3巻第3・4号　1999年3月　所収）